

# 保育者養成学科に在籍する大学生の意識調査

## A Survey on the Consciousness of the University Students in the Childhood Care and Education Course

次世代教育学部こども発達学科

小島 啓子

KOBATAKE, Keiko

Department of Child Development

Faculty of Education for Future Generations

キーワード：保育者養成，意識調査，進路変更

**要旨：**少子化や核家族化，両親共稼ぎの増加といった近年の社会情勢の変化に加えて，療育機関の増加や幼児教育・保育の無償化等により保育者を取り巻く環境も変わり，保育者は不足しているが，役割は多様化し高い専門性が求められるようになってきている。しかし，実際には保育者の離職率は高くそれが，キャリアアップを拒む要因ともなっている。大学においても，保育者養成学科に入学しながらも，かなりの学生が途中で進路を変更している。本研究は，本学科に在籍する学生の保育体験や進路決定，保育に対する意識などの項目を調査し，主に進路変更との関連を報告するものである。本調査では，3年の37%が進路を変更している。その多くが保育職からの他職種への変更であり，入学前にある程度の保育体験をしたものの割合が高いことが示された。

### I. 問題と目的

近年，少子化や核家族化，両親共稼ぎの増加等，子育てを取り巻く環境が急激に変化し多様化してきている。保育や幼児教育の分野においても，平成18年に創設された認定こども園を含めた保育所等は，平成30年度で34763園，保育者数も平成28年度で44万人弱と年々増加し，さらに保育所利用率も増加，率で言えば平成30年度は平成24年度のはほぼ2倍になっている。さらに，児童養護施設や児童発達支援事業所，放課後等デイサービスなどの福祉，特に療育領域での施設の増加が著しい。例えば放課後デイサービス事業所は，厚労省の調査（2018）によれば平成30年には平成24年の4.6倍の11728か所になっている。

加えて，待機児童問題や2019年10月に実施される幼児教育・保育の無償化により保育者の需要はさらに増し，保育職不足はさらに進むと言われている。そのような状況の中，保育所保育指針や幼稚園教育要領の改訂により保育者の役割は多様化し高い専門性が求められるようになってきている。専門性を高めるためには，時間をかけて保育実践を積みながら，新しい知識を習得していくことが必要である。

しかし実際には，保育者の離職率は高く，厚労省の

調査（2017）によれば，私営保育所では12.0%，公立でも10.3%，保育士の約半数が経験年数7年以下である。また，全国保育士養成協議会（2009）は，新卒保育士では卒業後に勤務した施設を1年未満で離職する割合が4人に1人と高く，更に3年後には約半数が離職する，というデータを発表している。

このように，保育職全体としては新任や経験の浅い保育士の離職率が高いのが現状であり，キャリアを積んで専門性を高めるまでにいたらない保育者が数多くおり，これは保育士不足にもつながるものと思われる。

こども発達学科は保育者養成を目的としているが，本学はスポーツ系の大学で部活が目的の学生も一定数おり実際に保育者になる学生の割合が他校に比べて少ない傾向がある。さらに，保育者を目指して入学してきても，大学4年間の養成期間中に断念する学生もかなり多いといえる。これは前述したような現在の保育者の現状とリンクするような状況である。

本研究では，保育者養成学科に入学した学生が保育者になる意欲を継続させ，就職後も働き続ける保育者を育成するために必要なことが何かを最終的に明らかにすることを目的とするものである。

本稿はその第一段階として，入学前の保育体験や保

育に対する意識、免許取得、卒業後の進路等の基本的な調査と、進路変更の有無や理由とそれらの関連について報告するものである。

## II. 方法

調査対象：こども発達学科在学生 135名（1年生70名，3年生65名）（表1）

表1 調査対象 内訳

	全体	1年	3年
総数	135	70	65
女子	97	51	46
男子	29	17	12
不明	9	2	7

調査時期：2019年7月上旬

手続き：大学の講義時間内に質問紙を配布し実施，ただちに回収した。所要時間は10分程度であった。

倫理的配慮：質問紙は無記名であり個人が特定されないことや研究目的以外には使用しないこと，回答の自由等の倫理的配慮について文書と口頭で説明を行った。

質問紙の構成（調査内容）：①大学入学以前の保育への参加体験，②保育者養成課程への進路決定の時期と理由 ③免許の資格取得について ④卒業後の希望進路 ⑤卒業後の進路変更の有無と時期，変更内容，理由，⑥保育者に必要なこと，の6項目について該当項目へのチェックと自由記述を求めた。

## III. 結果

大学3年生はすでに2年間余の保育関連学習と保育所と施設の実習を終えており，1年生は数時間の体験保育のみである。このように条件の違いがあるために調査結果は，全体・1年・3年と分けて示した。

### 1. 保育への参加体験

大学入学以前の保育への参加体験については，135名中87名（64.4%）が経験有と答えている。表2に1年3年別に分けて経験の有無を示した。3年生と1年生では保育体験の違いがみられ，1年生が有意に多い（ $P<0.01$ ）。さらに，表3に保育体験有の内容を示した。高校の保育コースの出身から小中学校での体験（この多くが職場体験学習と思われる）体験の幅もか

なり広いと言える。

表2 保育体験の有無（%）

	全体	1年	3年
保育体験有	87(64.4)	52(74.3)	35(53.8)
保育体験無	47(34.8)	17(23.3)	30(46.2)
回答無	1(0.7)	1(1.4)	0
計	135(100.0)	70(100.0)	65(100.0)

表3 保育体験有の内容（複数回答）

	全体	1年	3年
高校保育コース	16	9	7
高校保育コース以外だが保育体験有	35	21	14
中学での保育体験	45	29	16
小学校以前の保育体験	2	1	1

### 2. 保育者養成課程への進路決定の時期と理由

表4に保育者養成課程に進路を決めた時期の結果を示した。約半数が高校3年時に決めているが，高校入学以前にも約20%が決めており，そのうち4名は小学校時での決定であった。決定の理由（表5）は，自由記述である。“こどもが好き”という理由が一番多かった。3年生は回答のないものが多かった。

表4 保育者養成課程への進路決定の時期（%）

	全体	1年	3年
高校入学以前	29(21.5)	20(28.6)	9(13.8)
高校1・2年	17(12.6)	12(17.1)	5(7.7)
高校3年	64(47.4)	31(44.3)	33(50.8)
高校卒業後	10(7.4)	3(4.3)	7(10.8)
回答無	15(11.1)	4(5.7)	11(16.9)

表5 保育者養成課程への進路決定の理由

	全体	1年	3年
子どもが好き・関わりたい	61	44	17
あこがれ 自分受けた保育体 験から	10	5	5
職場・ボランティア体験から	5	4	1
資格が取れる	5	3	2
やりがいのある仕事	4	2	2
妹ができたから・こどもの世 話体験から	4	3	1
自分の特技を生かす	3	3	0
親やきょうだいの仕事	3	3	0
向いていると勧められた	3	2	1
子育てのため	1	1	0
その他	7	2	5
消極的な理由*	12	4	8
計	118	76	42

\*なんとなく、それ以外にできることがないから、  
とりあえず、家から近く学力的にも等

### 3. 免許の資格取得について

表6に免許取得についての結果を示した。1年生では回答無を除くと、全員は免許取得すると答えているが、3年では10名が取らない、9名はどちらか一つのみの取得と答えている。

表6 免許取得について

	全体	1年	3年
幼稚園・保育士の両方	110	65	45
幼稚園免許のみ	2	1	1
保育所免許のみ	9	1	8
取らない	10	0	10
回答無し	4	3	1

### 4. 卒業後の希望進路

卒業後の希望進路については複数回答である(表7)。全体では保育職が74名と最多ではあるが、1年生が保育職49名に比べ、3年生では保育職が25名、一般企業が22名、保育職以外の公務員が11名、教員8名と保育職の割合が低く、それ以外の職種が多い特徴がある。1年では教員が12名になっている。

表7 卒業後の希望進路

	全体	1年	3年
保育職	74(54.8)	49(70.0)	25(38.5)
保育を生かす仕事	6(4.4)	3(4.3)	3(4.6)
一般企業	27(20.2)	5(7.1)	22(33.8)
教員	20(14.8)	12(17.1)	8(12.3)
公務員(保育士以外)	17(12.6)	6(8.6)	11(16.9)
これら以外	10(7.4)	6(8.6)	4(6.2)
分からない	19(14.1)	12(17.1)	7(10.8)
回答無	4(3.0)	3(4.3)	1(1.5)

### 5. 卒業後の進路変更について

卒業後の進路変更については、変更の有無や時期、内容、理由について調査した。

#### (1) 進路変更の有無(表8)

入学時に考えていた卒業後の進路(希望職業)に変更があったかについてであるが、34名約25%が変更有である。3年生が24名であり、3分の1以上が進路を変えていた。

表8 卒業後の進路変更の有無(%)

	全体	1年	3年
変更有	34(25.1)	10(14.3)	24(36.9)
変更無	97(71.9)	56(80.0)	41(63.1)
回答無	4(3.0)	4(5.8)	0
計	135(100.0)	70(100.0)	65(100.0)

#### (2) 進路変更の時期(表9・10)

進路変更時期では、大学1年生では5月が一番早く、6月までに5名が変更していた。大学3年生では、2年時での変更が9名と一番多くなっている実習後と時期を限定した回答もあった。

表9 1年変更時期

変更時期	1年
5月	1
5~6月	2
6月	2
未記入	5

表10 3年変更時期

変更時期	3年
大学1年	3
大学1~2年	1
大学2年	9
未記入	5

#### (3) 進路変更の内容(表11)

変更内容に関しては、変更前の進路であった保育職と教育職に分け、内訳も記載した。保育職からの変更が全体で20名、教員からの変更が5名、保育職への変更も1名いた。変更先は小学校教員が6名(1年・3

年生ともに3名) 3年生では一般企業への変更が5名と一番多くなっていた。1年生2名は回答無である。

なお保育職から変更の欄に施設保育士、私立から公立への2つは保育職の中での変更ではあるが、回答した本人にとっては変更であると自覚していると思われるためここに記載した。

表11 進路変更の内容

		全体	1年	3年
保育職からの変更		20	7	13
(内訳)	小学校	6	3	3
	保育士以外	2	0	2
	公務員	2	0	2
	一般企業	3	0	3
	図書館司書	1	1	0
	施設等保育士	3	1	2
	私立から公立	1	1	0
	未定	2	1	1
教員からの変更		5	1	4
(内訳)	公務員	2	0	2
	一般企業	2	0	2
	中高から小学校	1	1	0
その他から保育士へ		1	0	1

#### (4) 進路変更の理由 (表12)

進路変更の理由について、変更先の進路別に示した。理由を記入した学生は25名中15名であった。

表12 進路変更の理由

小学校へ	・実習を通じて小学校に魅力を感じた ・給料や制度等の勤務条件がよい
施設保育士	・小さい子どもが苦手 ・先生から話を聞いて魅力を感じた
保育職以外へ	・こどもが嫌いになった
公務員へ	・給料がよい ・安定している
一般企業へ	・給料がよい ・保育職には向いていない ・保育職に比べて残業が少ない

変更理由が給料や制度の勤務条件等で変更先の進路に魅力を見つけた場合と、子どもが苦手・嫌いになった、保育職に向いていない等、否定的な理由がある。

給料がよい、残業が少ない等の変更先の魅力は裏を返せば、保育職の労働条件の問題を表していると思われる。

#### 6. 保育者に必要な能力 (表13)

保育者に必要な能力を、橋本ら(2014)や辻ら(2016)を参考に14項目を提示し回答を求めた(複数回答可)。項目は「子どもが好き」等の保育者の人間性や情緒性を強調するグループ、保育者だけでなく社会人としての基本的な態度を示すグループ、対人関係やコミュニケーションに関するグループ、保育者としての知識や技術のグループの4つに分けて記載した。

表13 保育者に必要な能力 (複数回答)

保育者に必要な能力	全体	1年	3年
子どもが好き	87	41	46
笑顔	80	45	35
元気・あかるさ	66	36	30
社会人としてのマナー常識	73	32	41
意欲的で向上心がある	24	9	15
責任感が強い	39	20	19
健康管理 健康・体力	49	20	29
保護者と関わる力	60	30	30
コミュニケーション能力	50	31	19
周りの人との協調性 気配り や配慮	54	31	23
子どもを引き付ける指導力	47	21	26
観察力	54	32	22
専門的な知識・技術	55	28	27
教養・基礎学力	17	7	10

1年生と3年生の選択率の比較を図1に示した。左が1年生、右が3年生である。選択率の違いが大きいのは、3年生の選択率が高い(p<0.05)「社会人としてのマナー常識」「健康管理・健康体力」である。実習後にこれらの項目の選択が多くなることは小笠原ら(2013)の報告結果と一致する。1年生が比較的高いのは「コミュニケーション能力」「笑顔」「観察力」である。全体的には人間性や情緒性の項目群が高い傾向がみられた。

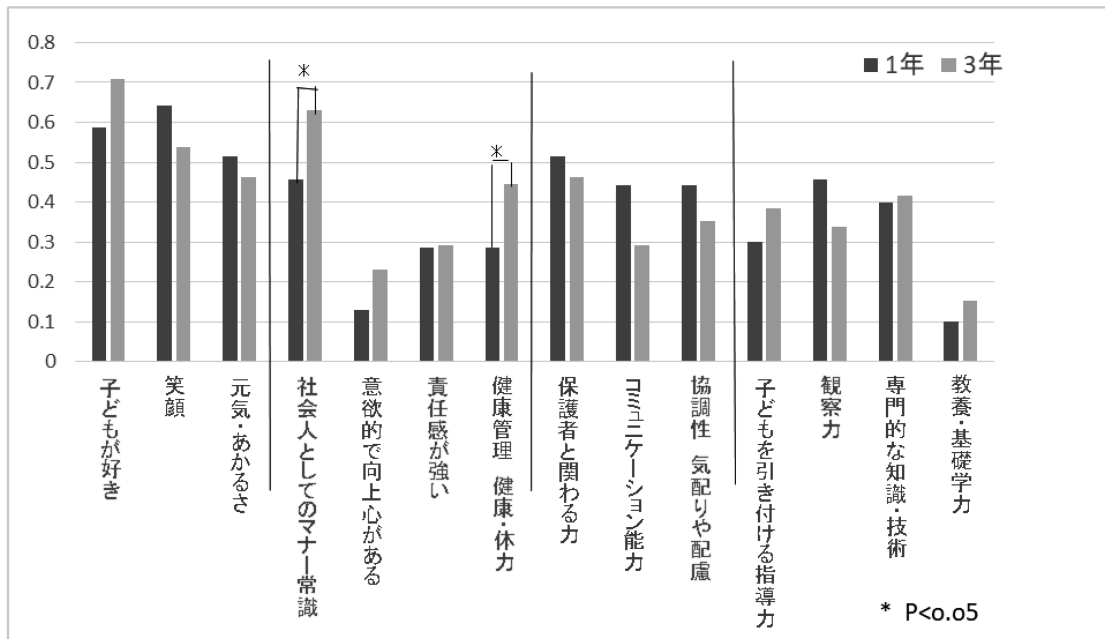


図1 保育者として必要な能力（選択率）

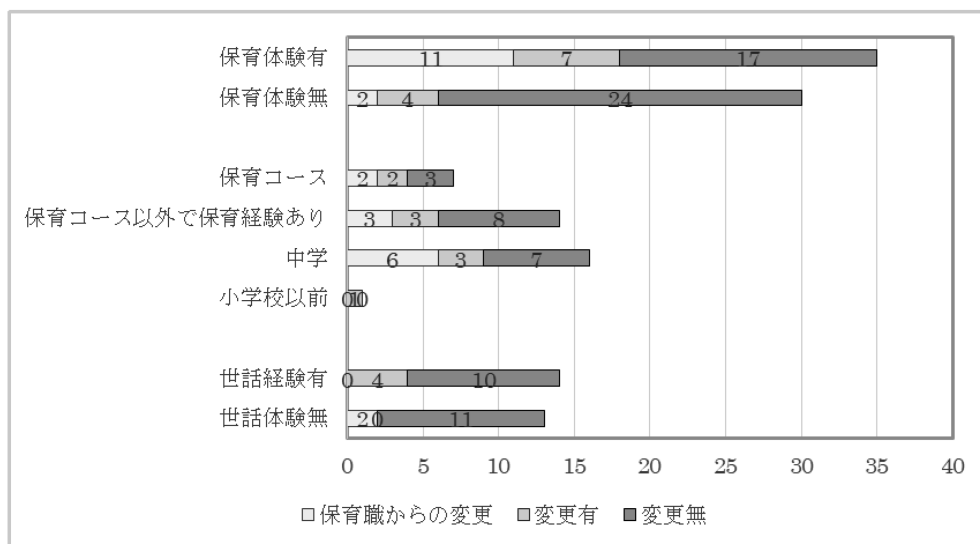


図2 大学入試前の保育体験と進路変更 3年

#### IV. 考察

これらの結果から、全体としていえることは、保育者になるという目的で入学した学生が、学年が進むと、他の職業希望に移っていく割合が高くなっていることである。1年の段階で、すでに14%が変更しているが、3年生になると37%が進路を変更したと回答している。

保育職への就業希望も1年生では70%だが、3年生になると40%を下回っている。しかし、資格については、3年でも83%が取得を希望しており、保育者に就くためというよりも資格を取っておけば将来何かの役

に立つという意識であろう。

松尾（2011）や森崎ら（2010）、小笠原ら（2013）の短大保育学生を対象にした調査では、新入生の保育職希望は85%前後であり、2年での進路変更は5%以下である。これらに比べると、本学の保育職への進路希望は低く、進路変更の割合も高くなっている。ただし、比較した調査は就学期間が2年間の短大である。短大に比べると4年制の大学では、資格取得に向けての勉強だけでないいわゆる学生生活を体験し、新たな価値観で自分を見直す時間的余裕があるものと思われる。

図2は3年生の大学入学前の保育体験と進路変更の



関連について調べたものであり、保育体験が有の方が無に比べて、進路変更する割合が高いことが示されている。3年生では、保育現場を知ることができる保育所や施設での実習を終えている。高校や中学校での短い保育体験で保育の楽しさは体験してよい印象だけを持って保育養成課程に進み、実習で保育現場の現実を知り否定的になるということがあると思われる。それが「子どもが嫌いになった」や「向いていない」という変更理由の記載になっているものと思われる。

さらに、保育職からの変更理由として勤務条件も多くあげられている。夢や憧れだけでなく生活はできないのである。保育士等のキャリアアップ検討特別委員会 報告書(2017)によれば、全産業の女性労働者との賃金格差は4万円ほどとのことである。特に奨学金等の返済のある学生にとって給料は大きな問題である。しかし保育士不足の現状もあり、勤務条件については行政主体で改善が進む方向性が示されている。

保育養成課程に進んだからといって、保育者にならなければいけないわけではない。しかし、その進路変更は、4年間の大学生活の中で自分を見つめなおし、より自分が生かせるような前向きな理由であることが望まれる。

本調査の結果からは、保育者養成の学びを深め現実を知ることによって、不本意な形で保育者希望を断念する学生もかなりいるという実態が明らかになった。

## V. 今後の課題

本稿では、主に進路変更と高校前の体験との関連について言及した。関連するその他の要因については資料として記載したのみで、今後分析考察する必要がある。実際の保育現場で求められる保育者に必要とされる能力についてのインタビューを行っており、保育者に必要な能力についての学生の結果との比較を行う予定である。

また一つの学年を縦断的に追っていくことで、さらに詳細でより有用なデータを収集できると思われる。

最終的な研究目標である入学した学生が保育者になる意欲を継続させ、就職後も働き続ける保育者を育成するために必要なことを様々なデータから分析して、保育者養成に役立たせたいと考えている。

## 【文献】

平成30年度放課後等デイサービス事業の報酬改定等に係る事業所影響調査結果の概要

平成29年社会福祉施設等調査の概況 厚労省

保育士等のキャリアアップ検討特別委員会 報告書(2017), 保育士・保育教諭が誇りとやりがいを持って働き続けられる新たなキャリアアップの道筋について

松尾智則(2011), 「幼児保育学科新入生意識調査報告」, 中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 第43号, PP.105-113

森崎陽子・小笠原真弓・室みどり(2010), 「保育課学生の養成期間中における意識の変化」, 信愛紀要第50号, PP.73-80

中村勝美(2005), 「保育学生の保育者像と保育者養成教育に関する一考察」, 佐賀短期大学紀要, 36, 139-146

中村絢子・馬場訓子・高橋敏之(2013), 「保育所保育における保育士の資質の問題点と課題」, 岡山大学教師教育開発センター紀要, 第3号別冊, PP.52-60

小笠原真弓・金石有希子(2013), 「保育者養成における新入生の意識－保育科入学制の意識を踏まえ効果的な実習指導のめやす－」, 信愛紀要, 第53号, PP.51-60

坂本渉・辻富士子(2014), 「保育者養成における学生の意識についての一考察－学生の意欲を高める実習指導を目指して－」, プール学園大学研究紀要, 第55号, PP.169-181

辻富士子・坂本渉(2016), 「保育者養成における学生の意識についての一考察(2)－3年間の横断的意識調査の結果を踏まえて－」, プール学園大学研究紀要, 第57号, PP.381-391

吉村英・片岡基明・吉村啓子(2007), 「保育者の資質に対する女子学生の意識－幼稚園教諭資質と保育士資質の比較－」, 京都女子大学発達教育学部紀要(3), 43-58

全国保育士養成協議会(2010), 「指定保育士養成施設卒業生の卒後の動向及び業務の実態に関する調査報告書Ⅱ－調査結果からの展開－」, 52